群馬県大学図書館協議会

会報

からっ風通信

2015 第33号

発行―2015年2月28日
http://gdtk.lib.gunma-u.ac.jp
編集―群馬県大学図書館協議会「会報」編集委員会　前橋市荒牧町4-2（群馬大学総合情報メディアセンター内）　TEL.027-220-7180

CONTENTS

■ 研究会報告　平成26年度第１回大学図書館研究会 ―― 2
■ トピックス ―――――――――――――――― 14
■ 編集後記 ―――――――――――――――― 14

研究会報告

大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修
（群馬県大学図書館協議会・群馬県図書館協会　共催）

○平成２６年度第１回

テーマ：「教員と図書館員が連携する学術情報リテラシー教育」
日　時：平成２６年９月１９日(金)　１３時３０分～１６時００分
場　所：高崎健康福祉大学　２号館２１３講義室
参加者：４５名（大学図書館３８名、公立図書館２名、高校図書館５名）
講　演：「教員と図書館員が連携する学術情報リテラシー教育」
静岡大学　大学教育センター講師　　松尾　由希子　氏
静岡大学　附属図書館　　渡邊　　貴子　氏

【概要】 静岡大学では、平成24年度10月より協働授業を行なっている。協働授業は、レポートやレジュメ作成のための適切な情報リテラシー獲得を目的とし、教員と図書館職員が互いの専門性を活かしながら協力して実施するものである。協働授業の成果として、学生については文献検索力の向上、図書館利用の活発化、図書館員を学習支援者として認識し、教員については適切な文献活用によってアクティブ・ラーニング（グループ発表など）が充実し、図書館職員については文献検索に関する学生の現状と傾向の把握などが確認できた。この講演会では、教員と図書館職員それぞれの立場から協働授業の意義や目的について話し、具体的に実践の現状や効果についても紹介する。

会場・高崎健康福祉大学

渡邊講師

松尾講師

動画を使った講義風景

質疑応答

参加者の意見等

「非常に具体的な講演で意義深いと感じた」「参考になった」という感想が多く寄せられました。「本学でも協働授業と似たようなことを行なっているが、事前の意識調査や事後のフィードバックを行なっていないことに気づいた」というように、現状の業務と照らし合わせ、ヒントを得た受講者もあったようです。実績のある講演だったため、「NIIの情報リテラシー担当者研修へずっと行きたいと思っていたので、担当しておられるお二人の話を聞くことができ、大変刺激になった」と期待通りの内容に満足度も高く、「教員と一緒に授業をすることで、図書館員を見える化する素晴らしい実践」など好意的な評価が多数寄せられました。

群馬県大学図書館協議会
平成26年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

教員と図書館員が連携する学術情報リテラシー教育

静岡大学 学術情報部 図書館情報課 レファレンス係
渡邊　貴子
otwatan@ipc.shizuoka.ac.jp

1

本日の発表内容（渡邊）

1. 先生との出会い
2. 協働授業の経緯
3. 学生の文献検索能力の把握
   -事前質問紙調査の結果から-
4. 協働授業の構成
5. 協働授業から得られたこと
6. 協働授業の効果
7. 協働の意義

参考文献

2

はじめに

- 本学で行った教員と図書館職員がそれぞれの専門性をいかして、協力して授業を実施した
- その授業を「協働授業」、当日の実習を「論文・新聞検索実習」と称し、一事例としてご紹介する
- 現段階では、試行であるが、平成27年度からは、附属図書館の業務となることが決まった

3

協働授業と論文・新聞検索実習

○協働授業

教員（松尾）と図書館職員（渡邊）が協働で行った授業

○論文・新聞検索実習

協働授業の中で、図書館職員が論文と新聞検索の方法について学生に説明し、行った実習

4

キャンパス：静岡（人文・教育・理・農）と浜松（工・情報）

学部：人文社会科学部、教育学部、情報学部、理学部、工学部、農学部

教職員数：役員7名　教員845名（含附属学校園教員）　事務職員329名

合計1,181名　（平成26年5月1日現在）

学生数：学部8,764名、大学院1,415名、専門職学位課程61名、研究生・科目等履修生106名　**合計10,346名**　（平成26年5月1日現在）

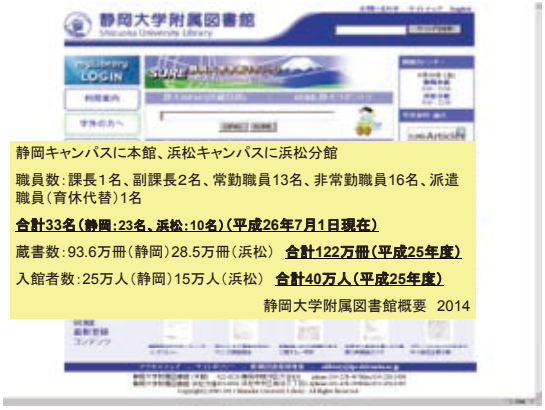
2014 国立大学法人静岡大学概要

大学教育体制の企画及び調整

教員の教授方法改善のための調査・研究

全学教育科目における授業計画の立案・実施

6



静岡キャンパスに本館、浜松キャンパスに浜松分館

職員数：課長1名、副課長2名、常勤職員13名、非常勤職員16名、派遣職員（育休代替）1名

合計33名（静岡：23名、浜松：10名）（平成26年7月1日現在）

蔵書数：93.6万冊（静岡）28.5万冊（浜松）　**合計122万冊（平成25年度）**

入館者数：25万人（静岡）15万人（浜松）　**合計40万人（平成25年度）**

静岡大学附属図書館概要　2014

1. 先生との出会い

8

知り合いになったきっかけ

- 共通の知り合いだった先生が運営している「リベラルアーツカフェ～静岡の教養～[1]」に声をかけられて、参加し、紹介された
- それをきっかけに、情報交換・意見交換をするようになった

9

2. 協働授業の経緯

10

全学教育科目[2]について

11

初年次教育①

- 図書館が、全学教育科目[2]の新入生セミナーの1コマを任され、毎年4月から7月にかけて図書館利用セミナーベーシック編（以下ベーシック編）と図書館利用セミナーアドバンス編（以下アドバンス編）という2種類のセミナーを行っている

12

初年次教育②

- ベーシック編は、新入生セミナーの1コマで、原則として学部の1年生全員が受講するものである
- ベーシック編は、図書館利用案内、シラバスを使って、専門科目の中から受講する講義を1つ選ぶ。選んだ講義のシラバスからキーワードを抜き出し、そのキーワードをデータベースを使って意味等の確認作業、蔵書検索の方法を説明
- グループワークが中心
- ワークの中で検索した図書を開架書架で探す

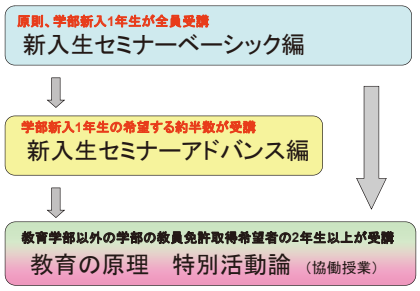
13

初年次教育③

- アドバンス編は希望者が受講するが、多くが新入生セミナーの1コマで実施されている
- 静岡キャンパスの1年生の約半数が受講している
- レポート・論文作成の概要、文献検索入門（図書・論文）、CiNiiArticles実習、日本語データベースの概要

14

初年次教育と協働授業の関係



15

協働授業を行うことになった理由

- 1年生の約半数がアドバンス編を受講しているものの、定着しているとは考えにくい
- アドバンス編の講師を担当して、学生は内容に興味や関心があまりないと感じた
- このセミナー（アドバンス編）がうまく機能していないのではないか？
- 学生の文献検索の現状はどうなのか？
- 先生方はどうされているのか？

16

3. 学生の文献検索能力の把握
-事前質問紙調査の結果から-

17

質問紙調査の項目

- 無記名で実施
- 学年、学部等の属性
- 図書と雑誌の違いがわかるか
- 図書館で実施しているセミナーについて
- 先生から課題が出されたら、まず何をつかって調べるか
- 調査等で困っていることや困ったときの対処法（自由記述）
- 図書館に対する意見・要望（自由記述）

18

質問紙調査の結果①

- 教員からレポート課題が出されたときに全体の70%近い学生が最初にYahooやGoogle等の検索エンジンを使っていた
- 図書か雑誌かの区別ができない学生は、受講生全体の15～20%が該当
- 検索をして、すぐにPDFファイルで論文が見られないと、その論文は見られないと思っている
- 開架書架にある資料だけで間に合わせている

19

質問紙調査の結果②

- 書庫に資料がある場合は、たいていあきらめる
- 図書も雑誌も使わない
- 大多数の学生が情報の信頼性や質に疑問を感じている
- 適切にキーワードが選べない
- 思うような必要な情報が見つからない
- 情報の取捨選択ができない

20

4. 協働授業の構成

21

協働授業のいま

- 平成26年度から渡邊を含めた3名の図書館職員が担当している
- 平成26年7月に図書館職員の意思確認が済み、平成27年度から附属図書館の業務として正式に実施することが決まった

22

協働授業の構成

	内容	担当	実施時期
①	質問紙調査の実施	図書館職員	実習前
②	レポート作成に関する説明	教員	実習前
③	論文・新聞検索実習	教員・図書館職員	当日
④	文献検索のワークシート確認・返却	教員・図書館職員	実習後
⑤	レポート提出	教員	実習後

23

①質問紙調査の実施

- 図書館職員が授業に出向き、質問紙調査を実施した
- 質問紙調査を行う目的と趣旨を伝え、属性以外は無記名で回答してもらった

24

②レポート作成に関する説明

- 教員が授業でレポート課題を出し、レポート作成に関する説明を行った
- 講義の中でプリント「中間レポート作成要項」を配布し、具体的な説明を行う
- 「文献検索のワークシート」も配布し、実習当日までにレポートテーマを決めて記入するよう指示があった

25

③論文・新聞検索実習

- 図書館職員が論文と新聞の検索方法について説明
- 説明の後、各自実習
- 説明に使ったパワーポイント資料を配布する
- 文献検索のワークシートには、レポートテーマと実習の結果を記入し、当日提出してもらったそれを教員と図書館職員で確認する

26

③-1論文・新聞検索実習の内容

- 図書館職員が論文と新聞の検索方法を説明
- 説明終了後、グループで1台のタブレット端末を使用し、各自が設定したレポートテーマにそった内容の論文と新聞記事を探す
- 文献検索のワークシートに、レポートテーマと検索した論文と新聞記事（各2件）の書誌事項を記入するよう教員より指示があった

27

③-2論文・新聞検索実習の内容

- 論文と新聞記事の書誌事項は、教員が指示した参考（引用）文献の書き方で記入
- グループ内で学生相互に記入内容を確認させ、当日の授業の終わりに提出させた

28

④文献検索のワークシートの確認・返却

- 実習後、教員と図書館職員が確認した文献検索のワークシートを次の週に学生に返却した

ワークシートに目を通すことの意義

・学生の理解の程度がわかる

・内容を確認し、正誤を学生にフィードバックすることで、学生はそれを認識できる

29

⑤レポート提出

- 教員へのレポート提出期限実習後の約3週間後であった

30

実習で配慮したこと

- 内容を簡潔にし、ポイントを絞って教えた
- 短い時間に必要なことを説明するよう努めた
- 図書館特有の言葉を使わずにできるだけわかりやすい言葉で資料を作成した

→　×書架〇書棚・本棚、×配架〇並べた

- 説明で使った資料を配布し、後日再び自分自身で検索できるようにした
- 後日の支援体制を明確にした

31

5. 協働授業から得られたこと

32

①学生の文献検索技術の定着条件の把握

1. ワークシートの確認で、教員と図書館職員からのフィードバックにより、情報・知識の修正が可能になり、正しい知識の定着につながっている
2. 「レポートを作成し、提出する」という目的をもち、繰り返し検索をすることが文献検索技術の習得や学生の理解の定着に大きく影響していると考えられる
3. プロセスのなかでの学び

33

②学生の傾向の把握

1. 説明時の情報量の多少が知識の定着にも影響していると思われる

→ 情報量が多くなると、理解度が落ちる

2. 紙に書かれたことを読まない学生が多い

→ 文章が長いまたは多いとなおさらその傾向が強まる

3. 説明をしても、PDFですぐに読める論文を中心に探す

→ 受講生のほとんどが同様の傾向

34

6.協働授業の効果

35

①学生の実態を確認・実感

- 一度要領をつかめば、その後、検索はスムーズにできる

→ しかし、必要としている情報を探すことは難しい

↓

ポイントは適切なキーワードを選択すること

- ある程度の専門知識と言語センスが必要
- 内容が複雑になるとさらなる検索技術も必要

36

②協働授業の位置づけを認識

1. 文献検索技術習得の目的は「学生がレポートや論文を作成すること」である
2. 協働授業を経験する前の私の意識は「学生に文献検索をわかりやすく教えて、理解してもらうこと」だった

↓

その先にある「学生がレポートや論文を作成すること」を意識して、深く考えていなかった

37

③協働授業における学生の完成物を確認

1. 学生が書いたレポートを読んだ
2. 平成26年度特別活動論の中での発表会を見学（聴講）

↓

- 「文献検索を教える」モチベーション
- 「文献検索を教えた」ある種の結果

38

④文献検索技術の習得

最新の質問紙調査の結果、

「平成25年度教育の原理」受講生の87%が本授業で文献検索の方法が身についたと回答している

39

7.協働の意義

40

協働の意義

- 教員と図書館職員の専門性をいかし、担当をすみわけて協働し、補いあい、それによって、学生に細やかに対応できること
- 教員･図書館職員･学生3者にとって効果的で効率的な授業ができたこと

41

アドバンス編の見直し①

〇見直しをすることになった理由

- 学生の興味・関心がほとんどない
- どうして文献検索技術が定着しないのか？
- 内容が学生にあっていないのではないか？
- こちらのやり方に問題があるのではないか？

42

アドバンス編の見直し②

〇見直したこと

- 教員への通知に課題等を課してもらうことを依頼
- 簡潔に、わかりやすく、短時間で
- 教えるポイントを絞った
- 実習内容のテーマを自由にした
- 図書館職員が実習中に席をまわり、できるだけ声をかけた
- 学生を無作為にあて、検索結果を説明してもらう

43

アドバンス編の課題

- 図書館だけの文脈で教えるのは、限界か？
- ツールで教えることも限界か[3] ？
- 教員がこのセミナーアドバンス編に少しでも関わるだけで、そのセミナーがまったく別のものになる

44

協働授業の感想

- 安心感をもてるなかで、楽しい経験ができた
- 協働授業からの学びと発見
- たぶん、図書館職員なら誰にでもできること、でも、先生から出された条件は必要
- どうやって時間を捻出しているのか？

45

参考文献

1リベラルアーツカフェ
http://liberalartscafe.blog91.fc2.com/（参照2014-7-28）
2静岡大学全学教育科目
http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/?page_id=105（参照2014-7-28）
3野末俊比古.“情報リテラシー教育の「これまで」と「これから」：図書館におけるいくつかの論点(<特集>情報リテラシー）”.2014.情報の科学と技術.64(1).p.2-7.
・渡邊貴子.“学生の文献検索能力の現状報告-教職講義の受講生を対象に”.静岡大学大学教育センターニュースレター.2012-12-4.
http://www.hedc.shizuoka.ac.jp/ニュースレター/（参照2014-7-28）
・渡邊貴子.“教員と職員の専門性をいかした協働の試み：教職科目における協働授業の実践”. 静岡大学教育研究.2013.vol.9.p.55-62.
http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/bitstream/10297/7363/1/9-0055.pdf,（参照2014-7-28）
・渡邊貴子. “教員と職員の協働授業による文献検索能力の定着の分析-質問紙調査の結果より-”.静岡大学大学教育センターニュースレター.2013-10-1.
http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/?p=330（参照2014-7-28）

46

参考文献

・渡邊貴子. “教員と図書館職員による協働授業(試行）から得られたこと-4回目の実施を終えて-”.静岡大学大学教育センターニュースレター.2014-2-21.
http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/?p=431（参照2014-7-28）
・森部圭亮. “教員と図書館職員による協働授業(試行）の活動報告”.静岡大学大学教育センターニュースレター.2014-6-9.
http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/?p=616（参照2014-7-28）
・渡邊貴子. “教員と図書館職員による協働授業(試行）の検証-「教育の原理」と「特別活動論」を受講した学生の質問紙調査より-”.静岡大学大学教育センターニュースレター.2014-7-28.
http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/?p=706（参照2014-7-28）

47

群馬県大学図書館協議会

平成26年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

教員と図書館員が連携する学術情報リテラシー教育

静岡大学大学教育センター
松尾由希子
oymatsu@ipc.shizuoka.ac.jp

1

本日の発表内容（松尾）

1.育てたい学生像
2.学生の実態
3.協働授業における教員の役割分担
4.協働授業の意義
5.協働授業を行なう際の条件—教員より
6.図書館職員に期待する教育・研究支援

2

1.育てたい学生像

3

1.育てたい学生像

（1）担当科目・・・全学の教職科目

2年次 「教育の原理」
3年次 「教育と社会」「特別活動論」
　　「教育課程と方法」
4年次 「教職実践演習」

4

1.育てたい学生像

（2）文部科学省の育てたい学生像

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材

↑

①主体的学修に要する時間の確保
・事前の準備（資料の下調べや読書、思考、学生同士のディスカッションなど）
・授業の受講（教員の直接指導、教員と学生及び学生間の対話や意志疎通）
・事後の展開（授業内容の確認、理解の深化のための探究など）

②生涯学習を前提とした能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換
（例）ディスカッション、ディベート、演習、実習など

（平成24年8月28日中央教育審議会答申[1]）

5

1.育てたい学生像

（3）文科省の目指す教師—教員の資質能力

「学び続ける教員像」

「・・・・・・社会の急速な進展の中で、知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究心を持ち、**学び続ける存在**であることが不可欠である」

↓

これからの教員に求められる資質能力
①教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力
②専門職としての高度な知識・技能
③総合的な人間力（コミュニケーション能力など）

（平成24年8月28日中央教育審議会答申[2]）

6

1.育てたい学生像

（4）教職担当者として、育てたい学生像

教職についた後も生涯を通じて学んでほしい。

①情報リテラシーの修得
＋
②確かな知識の修得
＋
③旺盛な学習意欲（学びを楽しむ）

↑

講義＋学生の能動的学修（アクティブ・ラーニング）

7

1.育てたい学生像

（5）担当科目の中のアクティブ・ラーニング

2年次 「教育の原理」—中間レポート、授業のカルテ
3年次 「教育と社会」「特別活動論」
　—中間レポート（レポートを用いてグループ発表）、ワークシート
　「教育課程と方法」
　—ワークシート
4年次 「教職実践演習」（実習や演習中心）

※中間レポート作成のために、「教育の原理」「特別活動論」で協働授業を行なっている。
＝文献検索技術を身につけることで、「情報リテラシーの修得」をめざす。

8

1.育てたい学生像

〇「教育の原理」の学びのカルテ

・A3　両面に15回の授業分の記入欄を作る。

・毎回の授業の終わり10分を使って記入する。

・「授業タイトル（自分でつける）」「学んだこと」「考えたこと（思ったこと）」を記入する。

→　・90分の授業内容を要約できる。
　・得た知識と感想を、わけて書ける。
　　→**レポートの練習**

※毎回コメントや線を入れて、翌週返却する。

・・・多人数授業であり、授業内での相互交流が難しいため、カルテを用いて学生の理解度を確認する。

9

「教育の原理」の学びのカルテ

※講義当日に示します。

10

1.育てたい学生像

〇アクティブ・ラーニングに対する学生の感想

「特別活動論」でレジュメを作成し、発表を行なった学生の感想

2014年7月17日、無記名の質問紙調査を行ない、93名から回答を得た。

グループ発表を行なってよかったと思いますか。

・「レジュメの作成を行なってよかったと思いますか」
「よかった」88名、「どちらともいえない」4名、
「よくなかった」1名

・「レジュメの発表を行なってよかったと思いますか」
「よかった」87名、「どちらともいえない」5名、
「よくなかった」1名

11

「よかった」と回答した学生のコメント

・資料の検索方法や要点のまとめ方が身についた。

・作成にあたって色々な知識が必要になり、学ぶことも多かったため、やってよかったと思いました。レジュメを作るのは大変でしたが、それだけ自分の知識も増えたと思います。

・文科系の論文を読むことができ、またその中でも自分たちが学んだような統計の知識や技術が用いられていることがわかったため。

・人からさまざまな意見をもらうことにより、自分の発表が良いものになっていった気がする。満足できる発表になった。

・論文をしっかり読む機会が今までにあまりなく、今回レジュメ作成にあたって、論文の内容を要約する際論文を何度も見直して、どこに何が書いているかわかるくらいまで読み込んだので、論文の書き方などがわかり、将来役に立つと思った。

・レジュメを作成することは、実際の教育現場でも役に立つと思う。また、テーマに沿った論文を見つけ、作成するのは大変だけど、それ相応の価値があると思う。

12

2.学生の実態

13

2.学生の実態

（1）文献検索に慣れていない

・学術図書とそうでない図書の違いがわからない。

・論文の検索ができない（9割）。

・1年次の「新入生セミナー」を受講しているのになぜ、身についていないのか？

（2）文献を探せなくても「やりすごす」傾向

・教員や図書館職員に質問しない。

（3）図書館を利用しない（利用価値をわかっていない）

※レポート課題を出しても、効果がない。

↓

協働授業・・・情報リテラシーを身につける

14

3.協働授業における教員の役割分担

15

3.協働授業における教員の役割分担

「教育の原理」を例に

（1）レポートの「書き方」について説明する

（論文・新聞検索実習の前週）

レポート作成のためのプリント（A3両面　1枚）

①レポートテーマの設定（具体的に設定させる）

具体例をあげる。（例）生徒目線で命を教える農業高校

②レポートの構成

1段落・・・テーマ、新聞記事を用いて、テーマ設定の動機について、まとめる

2段落・・・テーマに沿って論文の情報をまとめる

3段落・・・2段落をふまえて、自分の意見を述べる

16

3.協働授業における教員の役割分担

③字数

④モデル

前年度までの学生のレポート（作成者の許可を得たうえで）

⑤注意事項

論文と新聞を読む、参考文献の書き方、3段落に自分の意見を書く、だいたいの比率など

⑥提出日

⑦レポートの採点ポイント

原稿用紙の正しい使い方、新聞記事のまとめ方、設定したテーマと調べた情報に矛盾がない、参考文献の明記など

17

レポート作成の説明プリント

※講義当日に示します。

18

3.協働授業における教員の役割分担

（2）ワークシートの配布（論文・新聞検索実習の前週）

ワークシートの構成

①レポートのテーマ・・・協働授業当日までに書いてくる。

②レポートで使用する論文・・・協働授業当日に記述する。

参考文献（論文）の書き方の例、検索した論文の出典を記述するスペース、所蔵先の確認

③レポートで使用する新聞記事・・・協働授業当日に記述する。

参考文献（新聞記事）の書き方の例、検索した新聞記事の出典を記述するスペース、

19

3.協働授業における教員の役割分担

（3）学生の質問に答える。

（論文・新聞検索実習当日）

図書館職員とともに、学生の質問に答え、アドバイスをする。

20

3.協働授業における教員の役割分担

（4）ワークシートを確認して、返却する。

（論文・新聞検索実習後）

図書館職員とともに、ワークシートの文献の書き方を確認する。誤りがあれば、チェックマークをつける。アドバイスを書き込むこともある。

誤りを指摘された学生：
・配布資料を見直してもわからない場合、教員や図書館職員に質問にいく。
・修正して、再提出する。（再提出は任意）

21

確認を行なったワークシートの例

※講義当日に示します。

22

4.協働授業の意義

23

4.協働授業の意義

（1）図書館職員の専門性の高さをいかす

文献検索の際に学生が困っていること：

①テーマに関するキーワードをみつけられない。

図書館職員の支援：

キーワードを探せるように、配布資料を作成する。

②CiNiiなどのデータベースを活用できない。

協働授業時の質問対応のすみわけ：

・図書館職員—CiNiiの活用、キーワード探し

・教員、TA—教育学のキーワードを使った文献検索

24

4.協働授業の意義

「教育の原理」の学びのカルテにみる学生のコメント
（2013年5月13日）

・学内のデータベースは1年の時余り使わなかったので、これからは利用したい。
・今まで図書館で必死に探していたが、今回の授業でよい方法を知ることができてよかった。
・静大の図書館やホームページも様々な使い方ができるんだなと思った。これから積極的に使いたい。
・実際に使ったことはなかったが、今回の授業でその利便性を再確認することができた。
・渡邊さんの授業のおかげでみることのできない（PDF化されていない論文の意）の謎がとけました。

※論文・新聞記事検索実習により、文献検索をできるようになり、他の授業の課題や勉強にもいかしたい。

25

4.協働授業の意義

（2）学びを支えてきた図書館職員を「みえる存在」にする

学生の学びを支えるのは、教職員である。

しかし、実際に学んでいる側の学生は、講義を担当することがほとんどない職員について、どう認識しているか？

（例）図書館職員
多くの学生は図書館に出向かない。
→図書館職員の専門性について認識していないのでは？

26

4.協働授業の意義

協働授業

教員と図書館職員が同じ授業の中で、共に学生の指導にあたる。
↓
学修支援者としての図書館職員が視覚化される。（＝学修支援者として認識される）

協働授業後：
協働授業前と違い、ワークシートをもってレファレンス係に質問に行く学生が増えた。

27

4.協働授業の意義

（3）学生が図書館を使うようになる

多くの学生が図書館を利用しない。
理由：図書館の活用のしかたがわからない。

協働授業後：
・具体的な利用方法がわかる。
・学習支援者として、図書館職員を認識する。

→図書館利用につながる。

28

5.協働授業を行なう際の条件
—教員より

29

5.協働授業を行なう際の条件

2015年度は正式実施予定

協働授業の担当者選び
—図書館にお願いした2点について[3]

（1）意欲をもって取り組める人
・大学図書館職員に求められる資質・能力等を理解している
・図書館員としての専門性を活かして、教員とともに学生の教育にあたりたいと考えている

30

5.協働授業を行なう際の条件

理由：
①協働授業に関わる業務量の多さ
・実際の作業（資料作成など）
・教員との打ち合わせ

②教育者として学生の前に立つ
受講生は、教職志望者。今日の教員は、学び続ける姿勢が求められている。
→学生段階から、「学び続ける教員」を意識した授業構成
…情報リテラシー獲得を目指した協働授業もその一環
→教育者も意欲的に学び続ける姿勢を、確かな知識とともに示す必要がある。

31

5.協働授業を行なう際の条件

（2）原則として、担当者が配布資料を作成する

資料：
図書館員の知識、教育目標、教育理念、教育方法などが凝縮されている。
↑
教員とやりとりをしながら、図書館員が作り上げる。

①学生を知ることになる
「学生は文献検索について、どこまでわかっているのか？」「このような表現で伝わるか？」など

②教員を知ることになる
「教員が学生に定着させたいと考えている文献検索技術のレベルの程度は？」など

32

5.協働授業を行なう際の条件

資料作成における図書館員のメリット

・教員が学生につけさせようとする技術や知識及び学生の実態を確認する。

・自身の専門性を確認し、場合によっては学び直す。

図書館職員森部圭亮さん（今年度の担当者）の感想[4]：

・「……①（「論文と学術雑誌の関係」をさす）は学術雑誌に触れたことのない学生にとって抽象的な理解に留まりがちで、どう教えるとすっきり理解してもらえるか分からなかった。そういった学生の理解度や教えるコツは松尾先生との話し合いをとおして把握することができ、何をどこから教えれば良いのか、かなり明確になった。先ほどの例の場合、2年生でも論文についての理解はあやふやなことが分かり①から教えることを決め、講義では学生にとって馴染みのある週刊少年漫画雑誌を手に取りながら学術

33

雑誌の類似性を引き合いに出して説明した。……」

・「……また松尾先生からは、ただ資料に沿って説明するだけでなく、学生も積極的に巻き込んだ授業にするよう勧められた。例えば、インターネットを利用した資料収集のメリット・デメリットを学生に意見を述べさせたり、CiNiiの操作を壇上で実演してもらったりした。今回の講義は私の説明時間が40分で、あとの50分が実習の時間に充てられているため、当初そのような時間が必要なのか分からなかった。しかし実際にやってみると、学生はより主体的に、より集中して講義に参加してくれたように思う。……」

34

5.協働授業を行なう際の条件

教員側のメリット―資料作成時の図書館員との関わり

図書館員と綿密に打ち合わせをしたり、情報を伝えたりする中で、図書館員のもつ文献検索技術のスキルに気づく。

→教員の知識も向上する。

→学生への還元

（例）CiNiiの特徴について知る[5]

図書館員より、CiNiiは学術雑誌以外の雑誌も網羅していることを教えてもらう。

→レポート作成時に参考文献として使わないように、CiNiiにある非学術雑誌のタイトルを知りたい。

→図書館員が非学術雑誌タイトルの一覧表を作り、学生に配布してくれた。

35

6.図書館職員に期待する教育・研究支援

36

6.図書館職員に期待する教育・研究支援

（1）教育支援

・授業サポート

・学生に対して、レファレンスのしくみをわかりやすく伝えてほしい。

（2）研究支援

・文献の紹介

・専門情報を入手するためのデータベースの紹介

37

主な参考文献1

1中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』（答申）2012.8.28

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm(参照2014.8.25)

2中央教育審議会『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について』(答申)2012.8.28

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm（参照2014.8.25）

3松尾由希子「教員と附属図書館職員の協働授業正式実施に向けての課題」（web「静岡大学大学教育センター　ニュースレター」2014.3.24）

http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/?p=450(参照2014.8.25)

38

主な参考文献2

4森部圭亮「教員と図書館職員による協働授業（試行）の活動報告」（web「静岡大学大学教育センター　ニュースレター」2014.6.9）

http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/?p=616（参照2014.7.23）

5渡邊貴子「教員と図書館員による協働授業の効果の検証―『教育の原理』と『特別活動論』を受講した学生の質問紙調査より」（web「静岡大学大学教育センター　ニュースレター」2014.7.28）

http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/?p=706(参照2014.8.5)

39

主な参考文献3

・松尾由希子「教員からみる附属図書館職員との協働授業の意義」（web「静岡大学大学教育センター　ニュースレター」2013.7.1）

http://www.hedc.shizuoka.ac.jp/%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%B9%E3%83%AC%E3%82%BF%E3%83%BC/（参照2014.8.25)

40

トピックス　育英短期大学図書館

「野村たかあき原画展」を開催しました

図書館内で、10月20日～11月21日、前橋市在住の木彫・版画・絵本作家、野村たかあき氏作の版画絵本『やんちゃももたろう』の原画16点をお借りして、原画展を開催しました。原画展示用のスタンドやポスターなどは、学生が製作してくれたものを使用しました。

会期中に行われた学園祭「桔梗祭」(10月25日・26日）では、1日目に、野村たかあき氏によるギャラリートークが行われました。また、桔梗祭の2日間、学生による催しもあり、ヘルマンハープ部による野村氏作の絵本の読み聞かせと野村氏作詞の楽曲の弾き語り、JCC部による野村氏製作の「立絵紙芝居舞台」(群馬県立土屋文明記念文学館蔵）を使用した「立絵紙芝居」の上演などが行われました。

今回の展示は、野村たかあき氏をはじめ、多くの方々のご協力により、様々な角度から作品世界を味わえる、充実した内容となりました。学生たちも、原画のもつ温かさや力強さを感じ取ってくれたことと思います。

今年の桔梗祭における入館者数は過去最高となっており、本学の学生だけでなく、多くの地域の方々にも、展示や催しを楽しんでいただくことができました。

野村たかあき氏によるギャラリートーク

ヘルマンハープ部による読み聞かせと演奏

JCC部による立絵紙芝居の上演

原画展

野村たかあき氏作の絵本等の展示

編　集　後　記

仁上幸治『図書館員のためのPR実践講座 －味方づくり戦略入門－』(樹村房、2014）という本を読みました。とかく図書館員は、組織の内部に籠りがち、外部へのPRを怠りがち――という印象を持たれます。「サービスがイマイチでもお金がなくても、PRはどんどんやるべきです」(同書、p.58）という言葉を手掛りに、異業種との連携やイベントの企画にも積極的に取り組んでいきたいものです。